

ザ・タイガースのドラマー 瞳 みのる

ライブバンド、ミュージシャンを目指しながら、ザ・タイガースとしてのデビュー後は、実際にはアイドル的な路線を進んだ。

何で歌謡曲を…

不本意な売られ方

不本意な売られ方でした。何で歌謡曲をやらなかったのかと。ペイの仕方の問題もあった。これだけの仕事をして稼いでいるのに、何でもこれっぽっちしかないんだという不満も大きかったですね。けんかはしょっちゅうでした。皆、平等でしたから。

69年3月に加橋かつみが脱退。岸部一徳の弟の岸部シローが加わった。

僕らが東京に出てきて、一生、こういう道で生活していくんだろなと思ってた矢先でした。僕たちの間に徐々に亀裂が入ってきて。最終的に彼(加橋)がいなくなった。欠員を埋めるため、内輪の人間がいいということとシローを引っ張ってきた。だけど、苦しみも悲しみも喜びも共にしてきた結成当初のメンバーとは違うという、心の空洞ができたような気がしていた。

タイガースの時代、自身の社会とは違った各界の各士、多士済々の人たちとの出会い、交流もあった。

日常的に話ができ、見識や見聞、世界がかなり広がった。「もっとなんか見なきゃいけない」と教えてくれたのが作家の柴田錬三郎さんで

タイガースの解散後は芸能界から離れた。勉学、学問の道へ。慶応大とその大学院を経て、慶応高で漢文や中国語を教えた。

高校生の時、選択科目で中国語を履修して

高校生の時、選択科目で中国語を履修してから中国文学に関心を持った。これまでもまり勉強してこなかったのが良かったと思う。吸収しようという意欲はものすごく強いものがあつた。教えることは学ぶことだと思ふ。生徒からも随分学ばせてもらった。タイガースのことは離婚した前の妻から一切外して、それなると言われた。教育上、子供が芸能界に憧れたら困ると、僕はそれを守った。

岸部一徳と沢田研二が作詞、森本太郎が作曲した「One Goodbye (ロング・グッバイ)」による瞳へのメッセージを込めた呼びかけや、元タイガースのマネジャー中井国二さん(2011年死去)からの連絡などがあり、瞳の「鎖国」は解けていった。東京の日本料理店で08年12月、加橋を除く3人と約38年ぶりに会った。

文学のために必要

再び音楽の道へ

文学が分かるには音楽も分からなければならぬ。それで再び音楽をやろうと思つて来た時に中井さんがやってく



離れられなかった「あの4年」 ステージで全てを出し切りたい

1967年から4年間の活動ながら、グループサウンズ全盛期の中で人気を誇った「ザ・タイガース」。今年12月、44年ぶりにオリジナルメンバーの5人で再結成し、札幌を含め全国で8公演を行う。そのドラマーが瞳みのる。71年の解散後は芸能界から完全に引退、中国語や中国文学を学び、高校教師となり、再びバンドや音楽活動へ。タイガースが原点となる半世紀近い歩みを振り返り、新たな道筋へ思いを語ってもらった。(川島博行)

1960年代後半に活躍した当時のザ・タイガースのオリジナルメンバー。前列右が瞳みのる(ビーノドラム)で、時計回りに加橋かつみ(トッポギター、ボーカル)、岸部一徳(当時は岸部おさみ、サリーベース)、沢田研二(ジュリーボーカル)、森本太郎(タローギター)。沢田を除く4人が京都で結成した「サリーとプレイボーイズ」が原型で、沢田が加わって「ザ・ファニース」に。上京後、「ザ・タイガース」に改称し、



渡辺プロダクション提供

67年2月に「僕のマリー」でデビュー。その後、「モナリザの微笑」「君だけに愛を」「銀河のロマンス」「花の首飾り」「青い鳥」などヒット曲や名曲は数多い。リードボーカルに加え、コーラスによるハーモニーも特徴だった。71年1月の武道館コンサートを最後に解散。80年代初めには「ザ・タイガース同窓会」として再結成したが、瞳は不参加だった。

た。だから、メンバーと会つてみようかな。すごく良いタイミングでした。そして、彼らは再びバンドをやるつもりで話をしてくる。僕はびっくりしたが、やるのかな、ありかなって感じでした。

33年間務めた高校教師を辞めた後、11年9月〜12年1月の沢田のライブツアーに、バックバンドとして森本、岸部一徳と共に参加した。瞳にとつては、40年ぶりのステージだった。

恩讐越え5人結集

悔いは残さない

基礎となっているのはタイガースの時代。タイガースは重たいから外れた。重たいが、再結成しようとなった。そこから離れられないんです。これまでに個別に嫌なことがあつても、年月がたつて昔の思いは置いておき、恩讐を乗り越え、こうして再び集まった。僕らの関係は否定しきれないものがある。恐らく今回の公演が最後になるのかなと思つている。もう若くないし、全員が集まれる機会はないかな。タイガースのため老体にむち打って、悔いの残らないようステージで全てを出し切りたい。ここまで歩んできての現在ですから。

毎日少しずつ練習し、何となく戻ってきた。沢田は現役のミュージシャン。そのバックバンドだから、あんな素晴らしいドラムはないだろうと言われたら、僕も嫌だけど、沢田ももつと嫌だろう。足を引っ張りたくなかった。最初はメトロノームを付けて練習を始めたが、しばらくしたら、それは要らないよって沢田が言った。彼は僕を認めたと思つた。リズムをきっちり正確に打つのは一番の命ですから。初日の9月8日、幕が開いた時は昔のステージがよみがえってきた。お客さんが温かく、僕を乗せてくれるんです。ああ、良かったなあと思つた。ただ、この時は(加橋)かつみは参加せず、5人がそろつるのは果たせなかった。僕も意固地ですけど、かつみも



溝利文哉撮影

ひとみ・みのる 16年、京都生まれ。本名は人見殺。67〜71年にザ・タイガースのドラマーとして活躍。グループ解散後は芸能界から引退し、故郷の山城高校定時制に復学して卒業後、慶応大文学部へ入学。大学院を経て、慶応高の英文や中国語の教師となり、北京大に留学もした。中国文学への造詣が深い。移住旅行の引率でも北海道を何度も訪れた。著書に「ロング・グッバイのあとで」「瞳みのる 老虎再来」など。「道 老虎再来」同様に「晩秋」などのオリジナルCDも出している。

再結成ライブの前に、「ザ・タイガース 花の首飾り物語」という本を出す。代楽曲「花の首飾り」の作詞者、菅原房子さんをたどる探訪記もある。歌詞は68年に月刊誌「明星」で公募され、約13万編の中から選ばれた。応募時は渡島管内八雲町に住む八雲高定時制(当時)の4年生。現在は愛知県在住で、結婚して姓は変わっているという。瞳は電話インタビューしたほか、手を加えて歌詞の形にした補作詞のなかにし礼、作曲のすぎやまこういち、カバーした井上陽水、タイガースのメンバーらの話なども掲載。この曲をめぐる多様につづっている。

僕たちがもう一遍結成でき、こういう本も出せるのは皆さんが元気であるからで、奇跡に近い。菅原さんの詞は便箋7、8枚くらいに書いた物語で、それを歌えるようになかにし礼さんが2度手を入れて現在の形になった。菅原さんは謙遜していましたが、岸部一徳は最初のアイデアが大きいと思う。なかにしさんも「サッカード」は11人でも、10人分を彼女が書いた。最後の「ゴールを決めさせてもらったのは僕だ」と言っわけです。菅原さんをたたえる言は符合している。

「シー・シー・シー」のB面の隠れた名曲「白夜の騎士」の歌詞も68年、タイガースがレギュラー出演していたテレビ番組で公募された。この本では、約25万編の中から選ばれた有川正子さんの道内に住む10代の女性だったと記している。橋本淳が補作詞、すぎやまこういちが作曲した。

歌詞を公募した2曲と共に北海道出身者が選ばれ、ものすごい奇遇で驚いています。

トークライブ、京劇と歌舞伎の「コラレーション」、歌曲の作詞作曲、中国語訳、明治期の歌謡の研究など活動は幅広い。年の4分の1は中国に行っている。来年6〜10月には瞳のドラマを中心に組んだバンドのライブを全国各地で行い、道内は札幌サンプラザホールで10月3日の予定。洋楽や唱歌、中国の歌、オリジナル曲などを披露する。

音楽と文学を中心とした活動を続けたい。現役のプレイヤーでもあり、作詞や作曲に、小説も書き始めている。舞台の脚本も2本書き上げた。他のメンバーも皆、それぞれの道を歩んでいる。僕も新しい境地を歩んでいきたい。